



太陽の子

さいたま市立常盤小学校だより
令和5年10月号(第7号)
令和5年10月2日発行

【学校教育目標】

心身ともに健康で 思いやりの心もち 主体的に学ぶ常盤っ子の育成

喜んで登校 満足して下校

【めざす児童像】

- よく考える子
- 思いやりのある子
- たくましい子
- かかわりあいを大切にする子

秋の夜長

校長 三島 公夫

毎朝、児童会の代表委員が太陽の子広場で、登校してくる子どもたちに「おはようございます！」と元気な声を掛けています。それも満面の笑顔で。と言っても、これは単なるあいさつ運動ではありません。代表委員は「昇降口の水そうにいるのは、メダカと何？」とか、「校長室は何階にあるでしょう？」などのクイズを掲げています。子どもたちはそのクイズに答えてから教室に向かうこととなります。この取組は名付けて「楽しだもん勝ち！ときわっ子モーニングクイズ！」。月曜日の朝は大人でも気が重たいものですが、このクイズと明るいあいさつで不思議と気持ちが上向いてきます。

さて、2011（平成23）年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故。地震、津波、原子力災害により、たくさんの尊い命が失われました。今なお、故郷に戻ることが叶わず、避難を余儀なくされている方々も数多くいらっしゃいます。

私は、9月14日から15日にかけて福島県双葉郡を訪ねて被災地の現状を見るとともに、福島県内の小学校長と懇談してきました。インフラの復旧、生活環境の整備、住民の帰還、被災者の生活の再建など、復興は着実に進展しています。しかし、完了までには30～40年かかると予想されている発電所の廃炉作業や、周辺地域では未だ帰還困難区域が設定されているなど、地域社会が再び活気を取り戻すにはやるべきことが残っていると感じました。

視察では震災遺構の浪江町立請戸うけど小学校を見学しました。請戸小学校は海岸から300mほどのところにあり、その日、学校は高さ15mの津波に襲われました。大きな揺れの後、教職員は津波が来ることを察知し、避難所へは向かわずに、子どもたちを連れて学校の東約1kmのところにある大平山という小高い山を目指しました。車椅子の子は担任が負ぶって。この的確な判断により、子どもたちは全員助かりました。しかし、命は助かったものの家族と連絡が取れない子どもがいました。教員はその子とともに4日間、いくつもの避難所を回って家族を探したそうです。

福島県の教職員は発災以降、「学校は復興の最大の拠点」を合言葉に、教育環境の復旧に全力を尽くしてきました。未曾有の大災害に対して、教師や学校が果たした役割が確かにあったのです。そして今、福島県の教職員が一番心配していることは、“急速に進む風化”と“根強い風評”です。このことを知って、風化と風評に対しては私にもできることがあるのではないか、やらなければならないことがあるのではないかと、強く思いました。教育に携わる者として、当時、福島第一原子力発電所でつくられた電力を使って生活していた者として。

やっとな朝の空気に季節の移ろいが感じられるようになりました。夜のとばりにはコオロギの鳴き声が聞こえます。秋の夜長、福島を視察をきっかけにして、改めて「教育とは？」「教師とは？」について考えたくなってきました。秋の虫の鳴き声をBGMにして。